砂道教室

尻野ベロ彦

爽やかな春の日差しの中、公園では数組の親子連れが思い思いの場所で遊んでいた。４台並んだブランコに、昔ながらのジャングルジム、蛸のように曲がりくねった滑り台、そして柵に囲まれた砂場までが揃っているこの公園は、昼間子供の姿が絶えることがない。今日も、息子の利久（としひさ）と同い年くらいの子供達が元気に走り回っている。今日こそは…私は緊張が伝わらないように、できるだけさりげなく利久に聞いた。

「みんな楽しそうだね。利君は何をして遊びたい？」

利久は面白くなさそうに口をへの字に曲げ、黙りこくっていた。

「ブランコは？ほら、お友達も楽しそうよ。ちょっと乗ってみない？」

ブランコと聞くと利久は顔を強張らせ、私の手をぎゅっと握ってきた。しまった、と思った瞬間、「お家に帰る」と、利久は半べそをかいていた。

「まさか、公園デビューで躓くとは思わなかったよ」

「利君、初めてのブランコで号泣したんだっけ？」

利久が昼寝をしている間に友人と電話をするのが、いまの私には束の間の息抜きだ。特に綾（あや）は、高校3年間生徒会で苦楽を共にした親友で、5歳の女の子を育てる先輩ママでもあるので、ついつい長電話をしてしまう。

「それだけじゃなくて、お漏らしもしちゃったのよ」

「うわっ、超可愛い❤」

他人の子なら何でも「可愛い」で済ませられるけれど、自分の子の場合はそうはいかない。寝返りをうった、もう歩いた、〇〇ちゃんはおむつが取れたらしい、□□くんが習い事を始めた、そんな話に一喜一憂してしまう。

「もう3歳なのにジャングルジムも足が震えて1段も登れないし、滑り台では大渋滞を引き起こすし…」

「利くんはインドア派だから、最初は砂場とかの方が良いんじゃない？」

「砂場ね。なんか、いつも同じグループが使っているから入りづらくて…この前も柵を開けようとしたら、すごい白い目で見られた気がして、そのまま退散したんだよね」

思うに、あの柵が良くない。猫除けらしいが、大人は一緒に入りづらいし、柵がよそ者を排除しているみたいで、公園デビュー初心者には敷居が高い。

「それはあるかも。砂場にも色々お作法があるからね」

綾の言葉に、私は耳を疑った。

「砂場にお作法!?何それ？」
「知らなかったの？最近のママ界では常識よ。挨拶の仕方とか、道具の扱い方とか。最低限のお作法は身に付けておかないと」
　ということは、私達が作法を身に付けていないから、あの砂場グループに白眼視されていたってこと？そもそも砂で山を作ったり、穴を掘ったりするのに、どんな作法がいるというのだろう…モヤモヤしていると、綾が続けた。
「実は良いお教室があって、陽菜(ひな)も3歳から通わせているんだ。今度、体験にきてみない？」

　１週間後。私は利久を連れて、綾に紹介されたお教室の前にやってきた。見るからに立派な日本家屋で、門には木目の美しい一枚板に「橘流(たちばな)砂道教室」と彫られた看板が掲げてあった。「砂道」ってネーミングセンスが親父ギャグっぽいなと思っていると、
「こっちこっち。早くいこ!!」
　陽菜ちゃんが利久の手を引っぱって中に進んでいった。利久が心配そうな顔で振り返るので、私もすぐ後に続いた。門の先には手入れの行き届いた綺麗な庭が広がっている。水の打たれた石畳を１０メートル程進み玄関に入ると、三和土には小さな靴が揃えられ並んでいた。陽菜ちゃんも脱いだ自分の靴を揃えると渡り廊下をどんどん進み、奥の広間に入った。
「こんにちは!!」
「こんにちは、陽菜ちゃん。今日も元気に挨拶ができて素晴らしわね」
　和服姿の女性が近付いて、にこやかに挨拶を返すと、陽菜ちゃんは嬉しそうに顔を輝かせた。この人が先生なのだろう。ふわりとした優しそうな空気を身にまとっている。まだ４０歳前後のように見えるけれど、その割には落ち着いていて、年齢不詳だ。
「こんにちは。こちらが先日お話した、体験入会したいという友達です」
　綾に紹介されて、私は慌てて頭を下げた。利久は私の後ろでモジモジしている。
「ようこそお越しくださいました。お名前を教えてもらって良いかしら？」
　先生にまっすぐ見つめられた利久は、顔を赤くしながら小さな声で答えた。
「ちのとしひさ…」
「としひさ君。素敵なお名前ね。今日は初めてなので難しいことは考えずに、他のお友達と楽しく遊んでくださいね」
　そう言うと、先生は利久の手を引き、広間の真ん中へと連れて行った。
「みなさん、新しいお友達の、としひさ君がきてくれました。仲良く一緒に遊びましょうね」
　先生が紹介すると、子供達は拍手で迎えてくれた。利久は恥ずかしそうに頭を下げた。
　広間は板の間で、中央が掘り炬燵のように四角く切り抜かれ、砂が入れられている。稽古が始まると、子供達はバケツとスコップを手に、その「砂場」に入り、「よろしくお願い致します」とお互いに礼儀正しく頭を下げる。

「結局、砂遊びでしょ」と考えていた私は、すぐに驚きの光景を目にした。子供達が一心不乱にスコップを動かすと、見る見るうちに見事な砂の城やピラミッドが作りあげられていくのだ。それはまるで雪まつりの雪像のように精巧で、アートと呼ぶのが相応しい出来栄えだ。目を見張っている私に向かって、綾が言う。

「あれ、小学1年生だよ。私もあれを見たら、絶対に陽菜にやらせたいと思ってさ」

「すごい…みんな、こんな風になるの？」

「なりますよ。全ての子供は、砂道の素質を持っていますから」

振り返ると、先生が隣に立っていた。

「大切なのは、お友達を思いやる心と遊び心の２つです。どうすれば同じ空間・時間を共有するお友達と一緒に楽しく遊べるかを考え、協力して作品を作り上げる。それが人間性を育み、子供の生きる力を強くしてくれるのです。作品が上手になるのは結果であって目的ではありません。皆さん心配されるお作法も、　心配しないでも子供はすぐに覚えます。ほら、としひさ君、すごく楽しそうですよ」

先生の指さした先では、利久がケラケラ笑いながら他の子と一緒に砂の山を作っている。あの子、あんな風に笑えるんだ…こちらに気が付いて手を振る息子の姿に、うっかり涙が零れそうになった。

お稽古が終わりに近づくと、それまでニコニコしながら見守っていた先生が砂場に入っていった。子供達が先生を取り囲む。

「きょうは何を作るの？」

「恐竜がいい！」

「うさぎちゃん！」

「新幹線！」

みんなの顔を見回して、しばらく考えた後、先生は砂で大きな山を作り、その周りを踊るように動き始めた。不思議なことに、先生が手を触れると砂はまるで粘土のようにその場に留まり、砂山はあっという間に1つの形を成していく。それは利久の胸像だった。砂でできた利久は、楽しくてたまらないといった様子で笑っている。

「わぁ、本物みたい！」

「いいなぁ。僕も作って！」

子供達が歓声を上げる中、利久は目をキラキラと輝かせながら、その胸像を見つめていた。

お稽古が終わると、利久は陽菜ちゃんと一緒に顔を上気させながら戻ってきた。

「どうだった？」

「すごく面白かった！また遊びにきたい!!」

利久の言葉を聞き、私はその場で入会届にサインをした。先生に「一緒に頑張ろうね」と言われると、利久は「はい！」とはっきり返事をした。

砂道教室は月曜と木曜の週2日。稽古は、友達への声のかけ方から始まり、道具の扱い方、砂を人にかけない歩き方、トンネルの掘り方、崩れない砂団子の作り方など多岐に渡っていた。これまでは子供の遊びだと思っていたけれど、砂道教室で教わると奥深い世界が広がっていることに気が付く。動作は1つ1つが洗練されていて無駄がなく、見学をしている自分まで凛とした気分になってくる。「その習い事、意味あるの？」と懐疑的だった夫も、日に日に積極的になる利久の様子を目の当たりにしてからは文句を言わなくなった。梅雨が明け、蝉が鳴き始める頃には、利久もかなり上達し、砂で簡単な城を作ってみせた。そうなると夫も熱が入り、毎晩のように一緒にお城のデザイン図を描いてアイデアを膨らませるようになった。遂には「せっかくなら良い道具を使わないと」1万円もする高級ブランドの砂場セットを買ってきたので、さすがの私もあきれてしまった。

残暑が過ぎ、冷たい風が頬に心地よく感じるようになった頃、利久は皆の前で立派な砂の城を作りあげて進級テストに合格した。

「いつも一生懸命頑張っているから上達も早いね」と先生から褒められ、利久も嬉しそうだ。そんな利久を見て、私も誇らしかった。そして、「いよいよだわ」と密かに決意した。

小気味よく晴れ上がった10月最初の日曜日、私たち家族は公園に向かった。半年前の公園デビューで苦い思いをした、あの公園だ。相変わらず大勢の親子連れや小学生がいて、ブランコやすべり台には順番待ちができている。でも、今日の目的はただ1つ。私たちは脇目もふらずに砂場に直行する。いた!!きょうも、いつものグループが砂場に陣取っている。よく見ると、子どもたちは一心不乱に砂の塔を作っている。高さ1メートルはある立派な五重塔で、柱や瓦まで再現された力作だ。恐らくこの子達も砂道を習っているのだろう。一瞬、不安が頭をよぎる。いや、大丈夫。利久は先生から「どこに出しても恥ずかしくない」と太鼓判を押されたのだから。

「さぁ、利君も遊んでおいで」

私が促すと、利久は夫に買ってもらった新しい道具を持って、意気揚々と柵の中に入っていった。「遂に公園デビューのリベンジを果たせる!」私が固唾を飲んで見守る中、利久が塔を作っている子の1人に声をかける。二言、三言ことばを交わした後、利久はしばらく塔を作る子達の様子を観察し、そのまま砂場から出てきてしまった。

「どうしたの？」

私の問いかけに、利久はつまらなそうな顔で答えた。

「この子達の砂道は流派が違うんだって。お作法が違うから一緒に遊びたくない…」